多賀の国の物語７

名神高速道路からはじまる

歴史文化を楽しむ散歩

名神高速道路多賀サービスエリア（多賀ＳＡ）

多くの車が行き交う名神高速道路
往来の人達がしばしの休息をとるところが多賀ＳＡ
近代的な休憩施設が立ち並ぶ日本有数の規模を誇る多賀ＳＡ
実はＳＡとこの周辺には、楽しい歴史文化遺産がたくさん隠れています。
ちょっと車を止めて、日本の歴史と文化を楽しむお散歩に出かけませんか？

◆多賀ＳＡ（上り）から青龍山を望む

多賀サービスエリアから はじまる歴史文化を楽しむお散歩

1964年4月12日、名神高速道路栗東ＩＣから関ケ原ＩＣの間が開通したことにより多賀ＳＡが開業しました。始めはトイレのみの提供でしたが、その後、徐々に規模を拡大し、1984年4月には下り線にレストラン・ハイウェーショップ・休憩所と合棟で「レストイン多賀」が開業し、宿泊・入浴施設を持つＳＡとなりました。そして2010年11月に下り線の施設がリニューアルされ「EXPASA多賀」の愛称がつけられました。

多賀ＳＡの最も大きな特徴は、上り線と下り線が歩道橋で結ばれ、徒歩で移動ができることです。これは当初案内・休憩施設が下り線のみに、レストランが上り線のみに設置されていたため、利用の便を考慮して作られたものです。しかし、この陸橋があるおかげで、上り線・下り線を自由に往来することができ、さらにはＳＡの周辺にまで足を延ばすことが可能となっています。

実は、多賀ＳＡ自体、そしてその周辺は、日本史的な歴史文化遺産の宝庫なのです。ＳＡに車を止め、歴史文化を楽しむお散歩に出かけませんか？

◆名神高速道路高架の下に残る敏満寺仁王門跡

◆観音堂に安置されている石造十一面観音像

ＳＡに眠る巨大寺院

敏満寺（びんまんじ）

敏満寺は、平安時代に始まった天台宗の大寺院です。近くに紅葉で有名な湖東三山（西明寺・金剛輪寺・百済寺）がありますが、元はこれらの寺院と肩を並べる、いや、それを凌（しの）ぐほどの力を持った寺院でした。その伽藍はＳＡの背後に聳（そび）える青龍山の麓から、このＳＡのほぼ全域にまで及んでいました。

現在のＳＡの下り線は、敏満寺を支える手工業に従事する人達などが住んでいた町の跡です。また、下り線レストインの横から背後の森に通じる小径（こみち）があります。この道沿いの林床をよく見ると微妙な凹凸が見えます。これは敏満寺に奉仕する僧侶たちが住んでいた、小さなお寺を囲む土塁（土手）で、いくつものお寺が、青龍山に向かって連なっていたことがわかっています。

この小径を青龍山に向かって進むと、国道307号を跨（また）ぎ、胡宮神社の境内に入ります。実は、現在の胡宮神社の境内付近が敏満寺の中心部分であったとされ、神社への参道の上り口には、敏満寺仁王門のものとされる大きな門の礎石が残されています。また、胡宮神社の横には敏満寺に縁の仏像が安置されている大日堂や聖徳太子が刻んだと伝えられる十一面観音の石造を本尊とする観音堂があり、往時の敏満寺の姿を伝えてくれます。ＳＡより徒歩10分の歴史散歩です。

ＳＡの中にある中世のお城（上り線）

敏満寺城（びんまんじじょう）

ＳＡ上り線の進行方向奥、左手に公園のような休憩施設があります。実は、この公園部分が「敏満寺城」と呼ばれる、戦国時代に敏満寺が造ったお城の跡なのです。

殺生を戒めるお寺が何故お城を持っているのか？中世の天台系のお寺は、人の願いを加持祈祷（かじきとう）により天上の神仏に伝え、これを叶える「祈願寺（きがんでら）」でした。そしてその願いを託すのは、天皇を始めとする貴族、上級武家を始めとする裕福な人たちで、その代償としてお寺には膨大な土地が寄進されました。つまり、中世のお寺は大地主で、ここから莫大な収入を得ていたのです。

財が蓄えられれば、これを狙う者が出てくる。これから財を守るためには神仏の力もさることながら、武力も必要です。こうして敏満寺は、寺を護るために城を構える事になったのです。これがＳＡ内に残された敏満寺城です。

敏満寺城は谷を挟んで二つの郭（くるわ）（お城の中の区画）に分かれます。特に東京方面に位置する郭は高い土塁（土手）で囲まれ、その入り口は食違虎口（くいちがいこぐち）（通路を複雑に屈曲させ、敵の侵入を阻む構造）となり、戦国末期の典型的な城の姿を伝えています。

敏満寺は、湖北の浅井長政の襲撃により力を弱め、その後、織田信長の襲撃により壊滅しました。敏満寺城は駐車場と接していますから、バリアフリーの城郭散策が楽しむことができます（下り線からは歩道橋を渡ります）。日本でも数少ないお城です。

◆ＳＡ（上り）内にある敏満寺城
こんもり盛り上がっている部分が土塁です

ＳＡの隣に広がる美の世界

胡宮神社（このみや）と名勝庭園（じんじゃ）

◆書院から庭園を望む

◆参道の紅葉

敏満寺の旧境内は、胡宮神社境内と重なっています。胡宮神社は敏満寺の神宮寺（お寺と一体となっていた神社）で、御祭神は多賀大社と同じ伊弉諾命（イザナギノミコト）と伊弉冉命（イザナミノミコト）で、延命長寿を司る神様として、古くから信仰されてきました。本殿は江戸幕府により寄進されたもので、滋賀県の文化財に指定されています。

胡宮神社の下手に神社の事務を司ってきた明寿院という寺院があり、この書院に面して作られた庭園が「胡宮神社社務所庭園」として国の名勝の指定を受けています。青龍山の山裾を築山とし、多数の石を立て、流れ出る水を池に集めた、小規模ながら緻密な造形が楽しめる庭園です。近年、江戸時代に建てられた書院の修復が終わり公開されていますが、ここから観賞する庭園の美もまた格別です。

胡宮神社の境内には数多くの紅葉（もみじ）が植栽されており、秋には見事な紅葉を楽しむことができます。とりわけ神社の参道は、両側から延びる深紅・紅・橙・黄色等色とりどりの紅葉に染め上げられた綾錦の廊下を歩くようです。また、境内の足元には奈良東大寺の造営を支えた「水沼荘（みぬまのしょう）」と呼ばれた農地が広がり、用水として使う水を溜めた大門池が、千年の歴史を語りかけてくれます。

このような歴史の深さ、庭園の美、自然の美を味わう世界へＳＡから徒歩10分で浸ることができます。

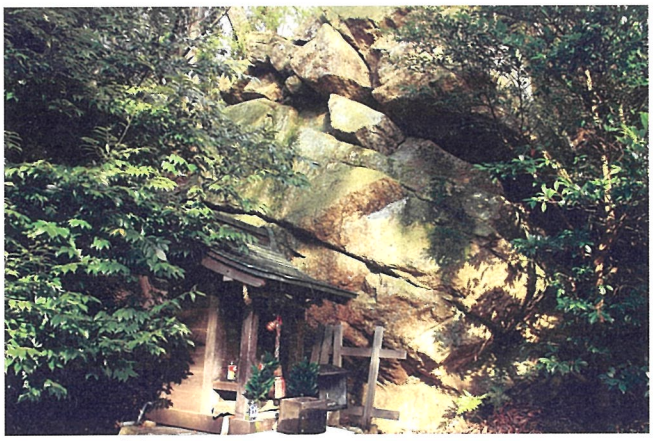
ＳＡ発パワースポットトレッキング

青龍山に登拝する

多賀ＳＡの背後にそびえる美しい山が青龍山です。これまで紹介した敏満寺も胡宮神社も、この青龍山に宿る神様への祈りから始まりました。

ＳＡに車を置いて青龍山の神様に登拝しましょう。ＳＡ下り線から小径を通り胡宮神社境内に入ります。本殿を参拝した後、道標に従いながら山中に入ります。程なく「御池」に至ります。ここは一年中枯れることのない泉で、この水を汲んで山頂の神様にお供えするのだそうです。再び上ると山の稜線に行き着きます。この付近からの眺望はまさに絶景。青龍山は標高は低いのですが、鈴鹿山地の前面に位置する独立丘陵のため、湖東一帯の平野、琵琶湖そしてその背後に連なる比良山地を一望することができるのです。ここから右に折れると標高 333.3mの山頂に至りますが、左のピークを目指します。すると間もなく眼前に巨大な岩が現れます。この岩こそが青龍山の神の宿るところ（磐座）で、山の名前のとおり、水を司る龍神がお祀りされています。途中にあった御池の水も、胡宮神社社務所庭園の池の水も、さらには大門池の水もこの岩に宿る神様が生み出したものなのです。何物にも替え難い「水」。ここは、この水を生み出す最強のパワースポットです。帰りは山頂を経由し、胡宮神社境内そしてＳＡに戻ります。往復約２時間の心身をリフレッシュさせるトレッキングです。

◆多賀ＳＡから青龍山を望む



◆青龍山山頂の磐座

ＳＡ発巨木と出会う田園散歩

男飯盛木（おとこいもりぎ）・女飯盛木（おんないもりぎ）

◆男飯盛木

◆女飯盛木

ＳＡ上り線の休憩施設の足元には敏満寺の集落と、その背後に広々とした水田が広がっています。そしてその中に大きな木が二本、立っているのが見えます。この木が男飯盛木・女飯盛木と呼ばれる、多賀大社の御神木です。

この変わった名前の由来は、“奈良時代のこと、元正天皇が重い病に罹られた。そこで多賀大社の宮人がを強飯（こわめし）を蒸し、杓子を作り、これで盛って差し上げたところ、天皇の病はたちまち平癒された。この時、杓子を削った木の残りを地に刺したところ、みるみるまに巨木となった。これに因み飯を盛った木だから「飯盛木」と呼ばれるようになった。また、多賀大社のお守りとして杓子が授与されるようになった。”というものです。

ＳＡから飯盛木まで散歩してみましょう。敏満寺城の虎口（城の入り口）を通り、敏満寺の集落から多賀尼子の集落へ入ります。そして八幡神社のあたりから農道に入ると目の前に男飯盛木が、幹を青龍山に向けて伸ばし、斜めに立っている姿が目に飛び込んできます。樹齢 600 年以上、幹周 6,32mのケヤキの巨木です。ここから 200m程離れたところに立っているのが女飯盛木。正面から見ると妖怪が両腕を上げているようにも見えます。これも樹齢 300 年以上、幹周 9.75m のケヤキの巨木です。飯盛木達からパワーを頂きＳＡに戻ります。往復 60 分程の田園散歩です。

お問い合わせ：一般社団法人多賀観光協会　滋賀県犬上郡多賀町大字多賀 389-1　TEL　0749-48-1553
発　　行：多賀町産業環境課　制　　作：公益財団法人滋賀県文化財保護協会